

牧場物語

7月27日(月) ~ 7月30日(木)

IN 藤田牧場

	午前	午後	夜
1日目	牧場へ移動	オリエンテーション	夜の動物探し
2日目	牧場体験	よつ葉牛乳工場見学	夕方手伝い、自由時間
3日目	早朝手伝い、農業体験	プラント見学	自由時間
4日目	早朝手伝い、牧場出発	お土産購入、関西へ	

一日目： 早朝より集合し、関西空港に向かいました。関空にて全員合流し慌ただしくも飛行機に搭乗する事ができました。新千歳空港に到着し、十勝方面に向かう前に今回のキャンプの食事メニューを決め、食材を考え、購入しました。北海道から連想するもの、自分たちの好物など参加者のみんなが食べたいものから献立を作りました。食材購入後は牧場へ向かいました。道中の光景に目を奪われ、広大な景色に歓声が上がっていました。目的地である『藤田牧場』に到着し、荷物を搬入後、ここでのせいかつについて説明を聞き、これからのプログラムを踏まえて食事の担当を決めました。そして夕食作りです。慣れない調理に四苦八苦されていましたが、声を掛け合う姿がありこれからの成長が楽しみです。夕食後は『扇ヶ原展望台』に動物探しへ向かいました。暗闇の中でしばらく待っていると、「キタキツネ」を何頭か見る事ができました。明日から本格的に牧場体験を行います。



二日目： 本格的にファームステイが始まります。本日のプログラムは生乳が生産者から消費者までどのような流れを経ているのかを学びます。午前中は牧場体験ツアーに参加しました。牛舎の説明や牛の体の作りの説明、エサや寝床の話、乳搾り体験、バター作りなど、『牛を知る』ことから始めました。メンバーも牧場全体に漂う臭いにも慣れ、積極的に牛に関わろうとされていました。午後は搾乳された生乳の送り先である『よつ葉乳業』へ工場見学に向かいました。どのような過程で、消費者に届くのかを学びました。生乳に対してや昨今のバター不足の話には驚きました。帰ってきてから実際に牧場でされている仕事を手伝わせていただきました。牛の寝床掃除、エサやり、糞尿の始末など、決してキレイではない作業ですが、誰も嫌な顔一つせず黙々と作業されていました。目の前で糞を出され服にかかっても、おもいきり糞尿を踏んでも、笑顔で「終わったー！」と報告に来てくれるメンバーがおられました。汚れた衣類も「仕方ない。」の一言で終わらせられるメンバーに成長を感じました。明日は農業体験です。沢山の体験から驚きと感動と学びを会得していきます。



三日目： 朝4時から起き早朝のお手伝いをさせてもらいました。眠気を振り払い、元気よく仕事をしました。朝食後は牧場体験から離れ、『農業体験』を行いました。「村瀬ファーム」に向かい、北海道の新ジャガを山程掘りました。自宅まで送れるという事なので美味しそうなものを吟味しながら、上手に箱詰めしました。ジャガイモ掘りの後、地元で採れた野菜をふんだんに使ったお昼ご飯をいただきました。午後からは『環境保全センター』に行きました。ここは、鹿追町で出た家畜の糞尿を集め、それを再生エネルギーとして変換する施設です。担当の方からの話は時々難しい内容もあり、「？」が飛んでいる時もありましたが、糞尿が電気や熱に変えられ、供給されているという事はなんとなく理解していただけました。夕方のお手伝いをするグループと夕飯を作るグループに分かれ、それぞれ作業を行いました。各自の動きも手馴れたもので、やる事が終わると次何をすればいいか考え動かされていました。



四日目： 三日目と同じく、早朝から牧場のお手伝いをさせてもらいました。同時に宿泊していたロッジの掃除も行いました。手際もよく率先して行いました。牧場のオーナーに色紙を渡し、出発しました。空港に到着すると、みんなが楽しみにされていた『お土産購入タイム』です。誰に何をかうか、必死に財布と相談しながら考えて選ばれていました。そして予定通り飛行機に搭乗しました。機内では、疲れが溜まっていたのかすぐに寝てしまい、気が付けば関西に戻っていました。関西空港にて昼食を済ませ、尼崎に向かいました。バス車内ではメンバーとお喋りをし、最後の最後まで楽しんでおられました。



<キャンプ総括>

本格的な牧場体験から参加者はもちろんのこと、我々スタッフも普段経験できない感動を沢山いただきました。牛舎は鼻が曲がるほど強烈な臭いであり、糞尿で靴や衣類が汚れても誰一人嫌がる事なく黙々と真剣に取り組まれていました。その理由は、今回の貴重な体験に大きな意味があると分かっておられるからだと思います。そして今回のテーマである『食』に対する意識もキャンプを通して徐々に変化が見られました。教科書やメディアからではなく、経験から「本物」を学ぶことで目に見える成長が起こります。メンバーはもちろんですが、我々もまだまだ学ぶ事がありました。これからも定期的に牧場体験に行こうと考えています。(竹中哲郎)